

馬介在活動センターにおける宿泊型体験学習

渡邊 竜 (帝京科学大学 環境教育・インタープリテーション研究室)

指導：古瀬 浩史

キーワード：馬、体験学習、キャンプ

1. はじめに

帝京科学大学ではフィールドミュージアム構想 (OPEN AIR LAB) が進んでいる。フィールドミュージアムとは、フィールドそのものを博物館として捉え、そこにある事物や事象を博物館の展示物とする概念であるとされている¹⁾。フィールドミュージアムの基本構造として、コアミュージアムとサテライトがある。コアミュージアムは活動の中心となるとともにサテライトを紹介する場所である。サテライトとは、コアミュージアムの周囲に点在する要素であり、フィールドミュージアムの生きている展示物である。本学の馬介在活動センター (以下うまセンター) も本学のフィールドミュージアムのサテライトの中の重要な一つとして考えられている。

うまセンターの設立目的の一つには地域連携活動が記載されており、障がい者乗馬会、学校遠足、ふれあいの日などの地域連携活動が行われている。しかし、現在行われている活動は馬と関わる時間が短いプログラムに限られており、長時間にわたり馬と関わるプログラムは行われておらず、馬を十分に理解するには時間が足りていない。

帝京科学大学環境教育・インタープリテーション研究室的久保田(2018)は卒業研究において、「うまセンター」をフィールドミュージアムのサテライトとして位置付けた場合に、どのようなプログラムや取り組みが必要であるかを検討し教育普及活動の全体計画を立案した。その中で、宿泊型の馬体験プログラム (以下うまキャンプ) を提案した。

本研究では、フィールドミュージアム開設以降のうまセンターを想定し、「うまキャンプ」を「直接体験から、動物や自然について、また、『人と動物の共生』について学ぶ機会」と位置づけ、本学の新たな地域連携活動のプログラムとして検討した。また、プログラムを通じて、課題を抽出し、定期的な開催に向けた開催モデルを作成することを本研究の目的とした。

(1) 「うまキャンプ」の企画と提案

概要、スケジュール案、運営体制などを記載した企画書を作成し、関係者への企画提案を行った。

(2) 実施と評価

「うまキャンプ」を実際に開催し、参加スタッフからのフィードバックコメントを得て評価し、キャンプの開催における課題点を整理した。実施後、実施報告書を作成した。

(3) モデルプログラムの作成

企画の評価、整理された課題点を基にして次回実施の参考となるモデルプログラムの作成を行った。モデルプログラムではスタッフ体制、企画の提案～実施プロセス、作成資料、スケジュール等を検討した。

2. 結果

(1) 「うまキャンプ」企画提案

概要、スケジュール案、主なプログラム、運営体制、対象者、実施地等を記述した企画書を作成し、うまセンター責任者、うまセンター職員、帝京科学大学地域連携推進センター等に企画の提案を行った。それらの過程で、地域連携推進センターと足立区教育委員会が連携して行っている大学遠足の一つとして実施する案が浮上し、最終的に足立区内に住むひとり親家庭を対象としたキャンプが足立区教育委員会と地域連携推進センターの共催で開催されることが決定した。

(2) 実施と評価

1) 開催準備

表 1 に示すスケジュールで、打ち合わせや準備を行った。

表 1. 準備スケジュール

4 月	企画立案 企画書作成
5 月	詳細なスケジュールの作成 うまセンターに企画提案
6 月	地域連携推進センターに企画提案
7 月	地域連携推進センターと足立区教育委員会の 共催での開催が決定
8 月	資料作成 足立区との打ち合わせ スタッフ確定 参加者募集
9 月	足立区との打ち合わせ スタッフミーティング 参加者確定
10 月	デモンストレーション 「うまキャンプ」実施

2) キャンプの概要

募集対象：足立区在住のひとり親家庭

小学生高学年、中学生とその保護者

応募人数：12 組 24 名

参加人数：4 組 8 名

目的：「馬が介在するプログラムで友人同士のコミュニケーションの促進を図り、馬を中心としたキャンプ生活を送る中で他を思いやる気持ちを持つ」

3) 実施プログラム

馬を用いることで、言葉の通じない動物を思いやる気持ちを育むことができるようプログラム、また、馬を介在させることによる参加者間のコミュニケーション、参加者とスタッフのコミュニケーションの促進を意識したプログラムを設定した。参加者は 2 組 4 名ずつの活動班に分かれ、スタッフが 2 名ずつ活動班に加わった。

表 2. キャンププログラム

日程	主なプログラム
1 日目	オリエンテーション 馬との出会い体験 曳き馬乗馬 テント設営 馬の話 飼養体験 馬糞燃料
2 日目	飼養体験 シャガイ 乗馬練習 ストラップ作り 外乗 自然観察・畑ツアー 振り返り

4) スタッフからのフィードバック

実施後、スタッフによるミーティングを行った。プログラムについて、キャンプ運営についての振り返りを行い意見、コメントを記録した。コメントは類似したものをまとめ、整理した。

5) 課題点の整理

ケーススタディの実施から得られたキャンプ計画および運営の課題について整理した。

馬に関する課題

① 馬の拘束時間が長く負担が大きい

今回のうまキャンプは 1 泊 2 日であり、馬の拘束時間が長い。馬にかかる負担を軽減するためにプログラム間やプログラム内でこまめな休息(フリーな時間)を与えること、昼の休みを長めにとること。また、キャンプの前後の運動量を調節するなどの配慮が必要である。

② プログラムに用いる馬の選定について

今回プログラムで使用した馬のうち 1 頭は、安全面を考えるとまだ十分にプログラムに活用できなかった。今回は一部のプログラムで使用したが、参加者が馬に引っ張られることがあった。曳き馬や乗馬などを行うにあたって、使用する馬とその馬の特性を十分に把握し、対応をする必要がある。ま

たその情報をスタッフ全員に共有されている必要がある。

参加人数に関する課題

馬を使用したプログラムという特性から参加者数に限りのあるプログラム設定になる。馬に深くかかわるという目標設定からも馬：参加者は 1：1～1：3 が理想だと考える。飼養頭数が多くないため、キャンプのイベントとしては小規模であり、少人数にしか体験が提供できない課題がある。

開催費用に関する課題

今回の開催費用は足立区と地域連携推進センターの合同事業となり、参加費が無料で行われた。独自開催などのケースでは参加費によって受益者負担で行われる場合も考えられるため、支出に関して以下に整理する。

表 3. 開催費用予算

項目	金額 (円)	備考
食費 (1 日目夜)	8260	スタッフ 20 名分含む
食費 (2 日目朝)	4300	スタッフ 20 名分含む
食費 (2 日目昼)	6700	スタッフ 20 名分含む
レンタル料	62960	送料込み
プログラム物品	15760	
消耗品その他	17330	
プレ物品	14690	予備費含む
合計	14690	

今回の参加者は 4 組 8 名で、参加費を徴収する場合 1 人当たり 16250 円となり、1 組当たり 32500 円と高額になる。これは参加者が少ないために費用が分散しないためであると考ええる。

※今回はバスをチャーターしたが、その料金は含んでいない

また、支出において多くを占めているのがキャンプ用品のレンタル料である (48 パーセント)。

表 4. レンタル物品内訳

項目	単価 (円) × 数量	金額 (円)
テント	3170 × 7	22190
テントマット	870 × 7	6090
シュラフ	870 × 24	20880
送料	2300 × 6	13800
合計		62960

キャンプ運営に関する課題

運営に際し、スタッフ間のコミュニケーションエラーが起こった。原因としてプログラム進行に関する情報や資料が担当者内でのみ共有されていたことがあげられる。また、食事の準備では想定された時間よりも大きく遅れてしまった。当日の雨天を想定しておらず、湿気の影響により火が点きづらかったことなどが原因として挙げられる。また、調理の際に用いた、オイル缶で作成されたカマドが古く、耐久性に問題があり鍋の重量に耐えきれず使用途中で壊れてしまった。火を用いたプログラムであり、安全管理の面で課題が残った。

(3) モデルプログラムの作成

今回のケーススタディから得られた課題点等をふまえ、今後の開催を想定したモデルプログラムを作成した。モデルプログラムは今回の企画を最初に提案する際と同じ、地域の小学生を対象に、参加人数を子のみ 9 名に設定した。ねらい等の設定、スケジュール案の考案もあわせて行った。

モデルプログラム概要

日程	10 月 1 泊 2 日
場所	帝京科学大学 馬介在活動センター 動物ふれあい公園
対象	小学校 3 年～6 年
募集	9 名
参加費	10000 円 (受益者負担の場合の想定)
スタッフ	うまセンター職員 2 名 学生スタッフ 14 名

スタッフ体制 案

うまセンター職員	3 名
学生スタッフ	14 名 計 17 名

準備の分担

企画全般・検討など	2 名 (担当+副担当)
馬プログラム	3 名
プログラム	3 名
食事・広報	6 名 (各担当+グループリーダー)

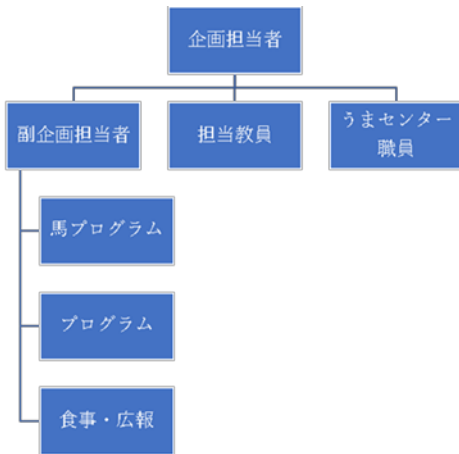


図. モデルプログラム組織図

得られた課題点は今回のモデルプログラムで解決を目指した。馬に関する課題では馬の拘束時間が長く、負担が大きいために、イベント前後には休馬日（馬が運動などを行わない日）を設けることや運動量の調節を行うことで対応する。モデルプログラムのスケジュール案では馬の様々な動きを観察可能なプログラム、子の間のコミュニケーションの増加を考えたプログラムを新たに設定したが、今回の実施と比べ、モデルプログラムでは馬のプログラムでの活動時間（乗馬や繋がれている状態など自由でない時間）と休息の時間（餌の時間や放牧などの自由な時間）の割合を、今回の約 25%から約 48%に増加させることができた。

表 5. 今回の実施とモデルプログラム 馬のプログラム活動時間と休息時間

今回の実施	モデルプログラム
1 日目	1 日目
13 : 00~17 : 30	10 : 10~17 : 30
230 分 (40 分)	330 分 (220 分)
2 日目	2 日目
6 : 00~14 : 45	7 : 00~16 : 30
405 分 (120 分)	350 分 (220 分)
合計	合計
635 分 (160 分)	680 分 (330 分)

※表中の時刻は、プログラム開始時刻～終了時刻、〇〇分は、馬のプログラム活動時間（休息時間）を示す。

参加人数に関する課題であるが、前述した通り、

馬：参加者の割合は 1 : 1 ~ 1 : 3 が理想である。

できるだけ多くの参加者に体験を提供するため、モデルプログラムでは比率を 1 : 3 とし、現状の馬の頭数に合わせて 9 名の定員と設定した。

開催費用に関する課題であるが、レンタル料が費用全体の約半分を占めていた。レンタル物品の中にはスタッフの宿泊用 TENT、TENT マット、寝袋などが含まれていたが、モデルプログラムでは宿泊するスタッフ数を最小限に抑えて、レンタル費用の中に含まれていたスタッフ用の物品レンタル費用を小さくした。また、今回は初の試みであったため、物品の確認のために実施前に物品をレンタルしたが、次回以降では削減可能な費用である。これらより費用を再計算したところ、想定予算は 84,770 円となり開催費用を 65%程度に抑えることができた。

表 6. モデルプログラム予算案

項目	金額 (円)
食費 (1 日目夜)	7760
食費 (2 日目朝)	8060
食費 (2 日目昼)	7100
レンタル料	35750
プログラム物品	4000
炊事物品	12100
雑費	10000
合計	84770

4. まとめ・今後の課題

うまセンターをフィールドミュージアムのサテライトとして想定したプログラムとして宿泊型馬体験学習を行った。本研究では、うまセンターで宿泊型イベントの実施事例をつくることができた。また、実施をもとに次回以降の開催を想定したモデルプログラムを作成した。馬と人は、パートナーとして共に暮らしてきた長い歴史があり、この事実からもうまキャンプは本学、フィールドミュージアムが掲げる目標である「人と動物の共生」を学ぶ機会として有効であると考えられる。

しかし、準備期間の長さ等によるスタッフにかかる負担などを考慮すると、継続をしての開催にはキャンプの運営体制を整えることが必要であると考えられる。

謝辞

本研究にあたり、地域連携推進センター花園誠先生、箕田都起子様、足立区青少年課の皆様にはイベント実現のために多大なご協力をいただきました。馬介在活動センター職員である、喜久村徳叔先生、高野正幸先生、うまセンター委員学生の皆様、古瀬研究室学生の皆様には、イベントのスタッフとしてご協力をいただきました。これらの方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 白川勝信：博物館と生態学(4) 地域の自然が博物館－フィールドミュージアムの活動－, 日本生態学会誌 57:273 - 276 (2007)
- 2) 久保田彩心：インタープリティブ・プランニングの手法を用いたうまセンターの教育普及計画：帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科平成 29 年度卒業研究要旨, 2018